

教育研究所研究員の所見

『構想に重点を置いた作文指導の一事例』について

1. 戦前の作文教育の盛んな時代には、「綴方教室」の豊田正子に対する大木顕一郎の場合のような個人指導がかなり行なわれていた。しかし、戦後一般に作文教育不振の中にあって、個別指導のもつ意義はますます重要さを加えていると思われる。本論文がこの点に着目しているのは結構なことである。
2. 作文指導は、「生活」も「表現」も共に尊重して進められねばならないが、この論文にはそうした配慮がかなりうかがわれる。
3. 作品が結晶するには、基底として作者の環境的・知能的・心理的・生理的な各条件が働き合っているのである。この論文でも、それらの条件をじゅうぶんに握するとともに、直接には作者の文章表現の型や傾向をも知り、指導の方向を見定める態度がもっと欲しい感じがする。
4. この構想の指導は、表現方法や技術にかかわるもので、修辭法的な分野に属するが、中学生段階には特に必要なものである。ただ、構想の限度は単に叙述の順序の変更を意味するだけでなく、文脈の修正に関連することであるから、文章の目的に照らして一貫性を失わないように注意しなければならない。
5. また、推考指導が表現技術至上となり、作者の真実な心情や、具体的な事実をゆがめ、作者の人間形成に障害を与えるように偏向してはならないことはいうまでもない。(谷 沢 隆 一)

『中学校における計算尺の効果的指導』について

1. この論文は、10年間生徒を実際に指導しながら研究された努力の結晶であって、まことにすぐれた研究である。
2. 対数を用いなくて、理論的に納得させる指導法を考えたこと、および2年3年に適宜計算尺を使用させる具体案が特にすぐれている。
3. 導入段階で、手製計算尺M・NE、P・Q尺、X・Y尺を取扱うことは適切と思う。またその手製計算尺には、MI尺、PI尺、XI尺が加えられているが、これはたいせつなことである。
4. 計算尺の単位として、15時間をあてて基礎段階の指導をしている。数学的意義をもった計算尺の指導をやり、計算尺を指導することにより生活への有用性を知ったり、これの積極的利用の態度を養うということになるとそれくらい時間は必要であろう。しかし、そのために他の教材がおろそかにならないようにじゅうぶん配慮されていなければならない。
5. 特に意欲のある生徒を課外指導する場合は別として、一般的に中学生の計算尺の指導は、乗法、除法ともにただ一つの方法をとり入れて、その方法の計算に習熟させ、多くの方法を取り入れないことがたいせつであるといわれている。(大 森 忠 勢)

『生徒の自然認識の実態とその指導』について

1. 教材内容の発展的関連性（系統性）を重視する指導は、子どもが自然を認識していく過程を考え、自然についての子どもの経験を計画的に積み重ねていくことである。この論文は、このような考え方を基底にもって、まず子どもがその日常経験や学習経験の結果として得ている自然認識の様相を明らかにし、そこからどのような積み重ねをしたらよいかをくふうしている。
2. 学力や経験の実態調査は、ともすると散漫な計画のもとに実施され、したがって結果の解釈も断片的になりやすいものであるが、この論文では、自然認識の望ましい方向や学習の順序などについての見とおしのもとに調査問題の作成が行なわれているため、その結果の解釈から有効な資料が得られている。
3. この論文では、中学校理科教材中指導上問題となっているいくつかの教材について調査を行なっているが、ある一つの教材を中心に、それと関連をもつ教材群についての体系的な調査研究をすることもたいせつである。
4. いくつかの教材についての実態調査結果の解釈内容から認識の一般傾向を帰納することはたいせつである。このことにより、他の教材についての同様な分析も容易になる。この点についても、この論文はおおむね妥当な考察を行なっている。
5. 実態調査結果を資料として、指導計画を作成し学習指導を行なうわけであるが、その評価は的確に行なわれなければならない。正しい評価によって指導仮説を修正したり、指導法を改善したりすることができるはずである。学習指導の改善にもこのような積み上げが必要であろう。

（小 田 正 衛）

『体育学習における教師の働きかけ』について

1. 体育学習を効率的に推進しようとするためには、その実践を方向づけ、裏づける理論構成を確かなものとしなければならない。この意味で、体育の本質に立脚した方法論を究明するために、実践の過程などに鋭いメスをいれていることが随所にみられ、共感を覚える。とくに、運動や運動技能を構造的には握し、そこから適切な学習のしかたを帰納しようとする意図には賛意を表したい。
2. 望ましい学習指導を可能にする条件は、おおまかには教材・子ども・教師・場の有機的な関連にあるとみることができよう。この研究は、主として教材と教師という観点からなされ、かくあるべきものという理想追求のすがたにおいて子どもへの働きかけが究明されている。この点、実践の具体例は良い参考となるであろう。
3. 実践的な研究で重要な価値のあることは、実証された成果のあることである。この結果にもとづいて仮説が検討しなおされ、修正され、さらに検証がなされる。このような研究の貴重さをきめる実証的な面にあまりふれていないのは、小論文としてのスペースにもよることであろうが、やや迫力を欠くきらいがある。
4. 用語の使用、とくに新術語を使う場合には、その意味規定をしっかりとしなければならない。

本論文においても用語の厳密さに欠けるきらいがあるので、今後この点にもじゅうぶんに留意されたい。(三 善 信 一)

『家庭生活に原因する問題生徒の継続的指導』について

1. 国語の教科としてでなく、生活指導その他で作文や日記を書かせることは、別に新しい試みではない。しかし、一般に家庭的な問題に教師が立ち入ることは難しくて指導しにくいといわれているが、現実問題に問題生徒およびその家庭における教育上の切実な問題を解決しえたという事実に着目したい。さらに、2か年間にわたっての詳しい指導の記録に基づいてまとめられていることを高く評価したい。
2. このような指導の実践的事例研究は、やゝもすれば事例の対象となった問題生徒の指導には結果的に役立たない場合もあるが、しかし、他の類似する問題をもつ児童生徒の早期発見と指導には、貴重な資料となろう。さらに、多忙な現場の教師には多少無理であろうが、一人一人の児童生徒の問題をよりひろく全体との関連において、とらえてほしい。それには乳幼児期からの性格行動・習癖・既往症および生育環境をも含めた生育歴を重視したい。
3. 事例でのM生徒は、日記を記すにあたって、おそらく初めは担任教師に見せるということ意識したことであろう。しかし、長期間書き続けるうちに、より鮮明に自分自身をみつめ、自らのありのまゝを書き記すことができたと思う。そうして、彼自身をとりまく人々とのわだかまりやゆがめられた人間関係の緊張が解消し、自ら発展的な新しい人間関係のための相互理解と親近感が維持されるようになったと思われる。
4. 一般に放浪という問題行動の直接的な要因は、児童生徒の冒険心・家庭の貧困・親からの叱責精神障害などの場合が考えられている。M児の場合は、父親の叱責もあろうが、その根底にある溺愛や病弱からくる性格の弱さ、親に対する葛藤的な感情、家庭環境などとともに、精神的離乳期にさしかかっている情諸的感情的に不定定な年頃であることを忘れてはならない。
5. さて、この「家庭生活に原因する問題生徒の継続的指導」に記されたような、効果をあげた基本的な条件を明らかにしておきたい。
 - (1) 問題生徒およびその保護者は、担任教師との精神的なつながりを全面的には拒否してない。
 - (2) 問題生徒およびその保護者に担任教師は、積極的に働きかけうる状態であった。
 - (3) 問題生徒とその保護者間に、叔母という好ましい仲介者がえられた。
 - (4) 問題生徒は、すなおに日記を書き、長期間自らの考えをそれなりに記述しうる力をもっていた。

(小 川 敏 通)